

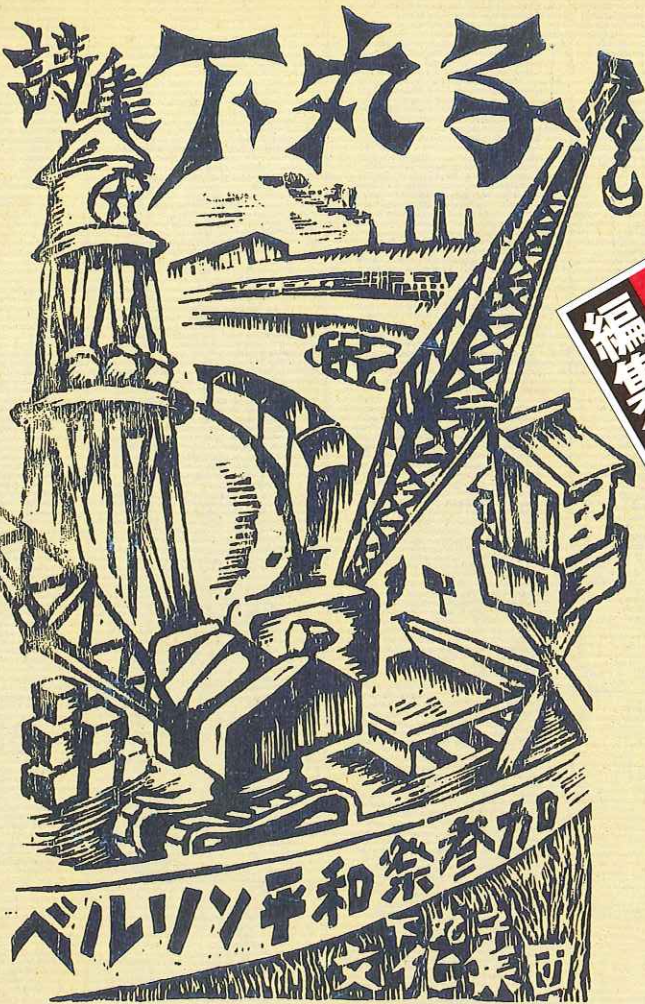
東京南部

サークル雑誌

集成

編集恩沢版

全3巻+付録1+別冊1



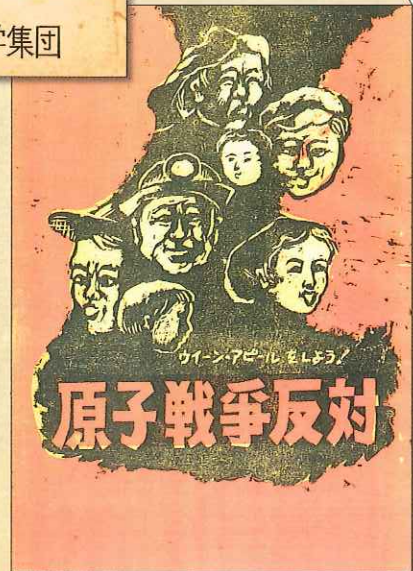
戦後文化運動雑誌叢書 ⑦

突堤



13

南部文学集団



B5判・上製・総1、800ページ

●解説——道場親信

●解題——浜賀知彦

●回想——浅田石一・桂川 寛・丸山照雄・望月新三郎

●本体挿価格——68、000円+税

敗戦後の1950年代、

全国各地に起こった「サークル運動」の中で発行された

サークル誌には、労働者の自発的・自主的な営みと、

その精神史をひも解く鍵が埋もれている。

戦後史研究において、まとまった時代像の希薄な1950年代を、

『詩集下丸子』に端を発した東京南部労働者サークルを中心に

刊行された雑誌群によって再検討する、画期的な復刻資料集！

不二出版

敗戦後、新しい日本を作ろうとして、全国各地で文化運動が勃興し、それにもなつた多数の文芸雑誌やサークル雑誌が誕生した。それらに携わつたのは、知識人や文学者だけではない。多くの労働者や学生や「主婦」らもいた。この運動は地層の変動を引きおこすようなものであったが、現在ではその動きは忘却されてしまつてゐる。

本資料集は、かつて自らもサークル運動を担つてきた浜賀知彦氏が、半生をかけて蒐集を重ねてきた膨大な資料群の復刻である。「詩集下丸子」を発端とした「東京南部」の文学運動の全容が解明される貴重な資料であり、これだけのサークル誌が現存している地域は他に見られない。これまで、研究者によつても見過ごされてきた資料群であり該当期の空白を埋める貴重な文献といえる。

また「付録」として、高島青鐘・江島寛・井之川巨・城戸昇・竹内昭雄らの詩集ほかを収録、さらに「別冊」として、詳細な解説・解題・回想と総目次・執筆者索引を新たに付し利用の便を計つた。

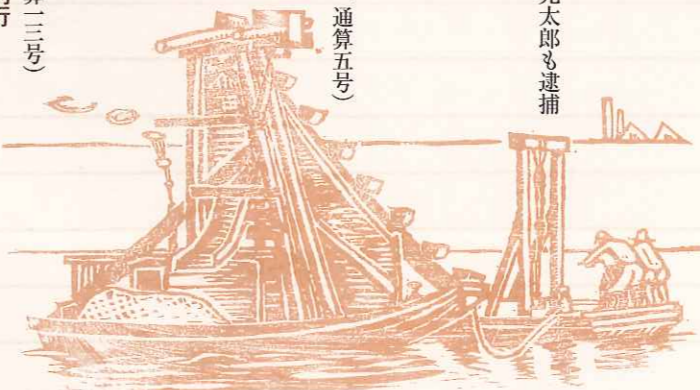
なお、小社既刊の復刻版『午前』『文化展望』『鵬』『ピオネ』藝術前衛『サークル村』『人民戦線』『デンダレ・カリオン』を戦後文化運動雑誌叢書の①～⑥と位置づけ、本資料集を⑦として、以降も全国規模で貴重な雑誌を発掘し復刻する予定である。

不二出版

関連年表

Table with 2 columns: Year (1945-1960) and Event (e.g., 八・二五 日本、無条件降伏、ポツダム宣言受諾)

日本、無条件降伏、ポツダム宣言受諾
新日本文学会結成
日本労働組合総同盟結成
日本国憲法公布
「人民」創刊(隔月刊の回覧誌)
松川事件
中華人民共和国成立
朝鮮戦争勃発
「人民文学」創刊(人民文学社)
このころ、安部公房、勅使河原宏、桂川寛ら、下丸子の文化工作に入る
「詩集下丸子」創刊
「京浜文学新聞」創刊
長編叙事詩「松川事件」共同制作委員会結成
「東京文学新聞」発刊
詩集「下丸子」のうた」発刊
「石ツブ」創刊
サンフランシスコ講和条約発効
「メデー」事件、京浜文学新聞社の入江光太郎も逮捕
「文学南部」発刊
「京浜のうた」発刊
「下丸子通信」創刊
朝鮮戦争休戦協定調印
「高島青鐘詩集」刊行
「南部文学通信」創刊(下丸子通信)改題、通算五号)
米田、ビキニ環礁で水爆実験
南部文化集団の江島寛死去、二二歳
「南部のうた」創刊
京浜絵の会発足
「版画集」集発刊
「京浜絵の会」創刊
日本共産党第六回全国協議会(六全協)
「江島寛詩集」刊行
「突堤」創刊(「南部文学通信」を改題、通算二二号)
「浅田石・井之川巨・城戸昇三人詩集」刊行
第三回国民文化全国集会、谷川雁、「全国サークル交流誌」提起
「突堤」二四号発行(この号が最後)
元南部文化集団の高島青鐘死去、四四歳
松川事件上告審判決、高裁判決を破棄・差戻し
南部文学集団解散
「生きてゐる風景(竹内昭雄)刊行



内容見本

京浜文学新聞

詩集「下丸子」に高まる支持

「下丸子」の復刊が、戦後文化運動雑誌叢書の⑦として、以降も全国規模で貴重な雑誌を発掘し復刻する予定である。...

発刊のことば

この「下丸子」は、戦後文化運動雑誌叢書の⑦として、以降も全国規模で貴重な雑誌を発掘し復刻する予定である。...

詩集「下丸子」をよ

下丸子の詩集は、戦後文化運動雑誌叢書の⑦として、以降も全国規模で貴重な雑誌を発掘し復刻する予定である。...

街頭へ詩を

西田川の某新聞に「街頭」の詩を、通算二二号)...

九州に

西田川のお母さん、九州に...

大水害

西田川のお母さん、大水害...

三米徳上り

西田川のお母さん、三米徳上り...

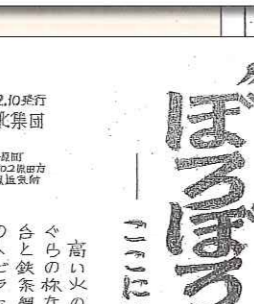
高島青鐘

高島青鐘の詩集、戦後文化運動雑誌叢書の⑦として...



ピカドンを許さない!!

ピカドンを許さない!!



ぼろぼろに使用果し雑布のようになす

南部文学通信 No.5

高島青鐘の詩集、戦後文化運動雑誌叢書の⑦として...

解放区と呼ばれたあの部屋

小関智弘 ● 作家

焼跡のバラックを建てかえたわが家の片隅に、板敷三畳の自分の部屋を持ったのは一九五二年、十九歳のときだった。そこから詩を書きいまま同人誌『塩分』の仲間の及川雅史君が、のちに「あの部屋はまさに解放区だった」と言った。文学少年だった彼は岩手の工業高校を出て東京で働くにあたり、人づてに大田区山王に住む国文学者の吉野裕さんをたずねて、「線路向うの入新井の町に魚屋の件で文学青年がいるよ」と教えられた。彼と似たようにしてわが家の玄関に立った若者たちが、その部屋を拠点にして青年会をつくり、うたごえサークルや幻灯会や原爆展の活動をはじめた。「入新井文学」というサークル誌も生まれた。町工場労働者や商店員や主婦だった彼等は、毎晩その部屋に集った。太宰治が好きで、これだけは譲らない女性が

いた。小林多喜二の「党生活者」の女性の扱いに冗談じゃないと反撥する男もいた。詩の好きな青年がアラゴンを真似て、町なかの壁新聞に貼り出した。その部屋の押入れには謄写版が一式あって、誰彼なくそこでガリを切った。

浜賀知彦さんがかつてのサークル雑誌の細目をつくりたいと言ってきたとき、とっさにわたしの脳裏をかすめたのは、あの部屋に出入りした多くの仲間のことだった。やがてわたしはあの「部屋」が、下丸子にも池上にも馬込や桃谷の町にもあることを知り、その住人たちとも親しくなった。浜賀さんは十数年の歳月をかけて、あの「部屋」が品川区にも港区にも目黒区にもあったことを、調べあげてくれたのであった。

この復刻版で、その「部屋」の解放区の意味がより鮮明になるだろうと期待する。

江島寛詩集



高島青鐘詩集



石つぶてとしての詩

坪井秀人 ● 名古屋大学大学院教授

『荒地』派中心の戦後詩史を問い直す議論が現代詩人の間で活発化した時期があったが、私も別の角度から同じ問いを考えしてみたことがある。モダニズムの前衛主義と左翼リアリズムの政治性とを戦時期の(空白)をフィルタリにかけて二つながらに否定したのが『荒地』だったとすれば、『列島』はサークル詩運動の集約を媒介として両者を統合しようとしたと位置づけられる。

『荒地』派の孤立個人主義と『列島』派の集団協同主義。かつて戦後詩史はこの『荒地』『列島』という対立軸によって語られたが、左翼の退潮と詩に関わる言説編成の変化が影響して『列島』とともにサークル詩の運動も歴史の閉架書庫に封印されてきた。しかし、封印が解かれるやいなやその氣息は、長い時間の抑圧を嘲笑うように熱く、生々しく甦った。

『詩集下丸子』や『石つぶて』の存在は『列島』を調べる過程で知ったが、その時から神秘的なまでの光彩を放っていた。関根弘が批判的に取り上げれば尚更に、その運動の鋭角を自分なりに感じとめたいと願った。もちろん運動の当事者だった井之川巨の著作や『共同研究 集団』からその輪郭は描けたとしても、東京南部地域のごく限られた拠点から発信を行ったこれらの運動体の全貌は文字通り幻のままだった。その後私自身は国鉄詩の調査を進めたが、大規模組織に属さない下丸子の運動がこのように明らかになるとは思ってもみなかった。正直、興奮を禁じ得ない。労働の合間にガリを切って人の手から手へと渡されていたこれらの詩の言葉は、現在たたいまも、まさに石つぶてとして私たちの胸元に投げ込まれているのだ。

言葉をリレーする

西川祐子 ● 近現代史研究者

復刻版によって60年後の21世紀に、1950年代のサークル雑誌を読むことができる。ガリ版と呼ばれていた謄写版印刷の几帳面な手書きの字は、鉄筆で二字一字、刻まれたままである。詩文が多く、ページ構成とレイアウトに工夫がこらされている。頁に挿入されている小さなカットも手描きの写しであって、まだ焼け跡の残る風景、特殊管理地帯であった朝鮮戦争の軍需産業の工場、大型トラックと戦車、シヨールを真知子巻きにした女性像、故郷の山河など、さまざまなテーマが時代を語ろうとする。後世の読者である私たちの想像力はどこまでこれらの労働詩の現場に近づくことができるか。読む力が問われるであろう。

時空を超えた労働者詩人たちの声

ハリー・ハルトウーニアン ● ニューヨーク大学教授

東京南部の「労働者サークル」から生まれたテキストが三巻本として公刊されることになった。これは、もし忘れられさしなければもっとも約束に満ちたものだった戦後日本の社会運動を救い出すことであり、民衆精神史の形成におけるもっとも基礎的な経験のひとつをドラマティックに想起する試みである。この全国規模の社会運動は、六十年代初頭までにいったん消失し、経済成長と二党支配の戦後「民主主義」政治の暗雲に隠されてしまっていた。わたしたちは、東京南部の労働者が残したこうした詩のテキストや、他地域のサークル集団の文学的創作をいまこそ読まなくてはならない。それは、労働者の生活について教えられるからだけでなく、知識人やブルジョアという他者が占有してきた力を労働者が自己獲得しようとするときに、いったいどのような予期せざる「中断」や「宙吊り」が生じるのかを知るためでもある。詩を書くことは、労働現場のリズムや日常

生活の社会性との断絶を創りだす。このような実践こそ出来事と呼ばれるべきである。それはただ政治的であるとか、ただ文化的であるとかではない。同時に政治的かつ文化的なのだ。詩を書く時間を盗みとるといふことは、労働者が文化の能動的な生産をとおして声を獲得する政治教育の不可欠の一步である。その瞬間においてこそ、誰が語る権利をもつのかに関する古い神話が揺らぐ。労働者サークルとは教養形成の一形式であり、自己形成である。このような多様で周辺化されたサルタンが登場したのは、運動の宣伝役としてでも社会的カテゴリーの代表としてでもなく、まさに労働者詩人としてであったことをしつかりおさえておいてほしい。かれらは今日のわたしたちの闘争や時代診断にかかわりをもっている。かれらは、時空を超えた存在であり、歴史から消されているもうひとつの「現在」の面影であり、残余であり、そこから到来した亡命者たちなのだから。



下丸子駅

収録巻	資料名	創刊年月日	全号数	号数	発行年月	欠	原本の判型	頁数		
第1巻	詩集下丸子	1951年7月	全4集	第1集	1951年7月		B6判	56		
				第2集	1951年10月		〃	68		
				第3集	1952年5月		〃	34		
				第4集	1953年5月		〃	83		
	京浜文学新聞	1951年10月	全6号	第1号	1951年10月		B5判	4		
				第2号	1951年11月		〃	4		
				第3号	1951年12月		〃	4		
				第4号	1952年1月		〃	4		
				第5号	1952年3月		〃	4		
				第6号	1952年4月		〃	4		
	くらしのうた	1952年1月	全1号	第1号	1952年1月		B6判	35		
				第1号	1952年2月	未見		-		
				第2号	1952年3月		B5判	8		
				第3号	1952年5月		〃	12		
				第4号	1952年6~7月?		〃	8		
				第5号	1952年7~8月?	未見		-		
				第6号	1952年9月?		B5判	8		
	石ツブテ	1952年2月	全7号	第1号	1952年2月		〃	4		
				第2号	1952年3月		〃	4		
				第3号	1952年5月		〃	4		
				第4号	1952年6~7月?		〃	8		
				第5号	1952年7~8月?	未見		-		
				第6号	1952年9月?		B5判	8		
				第7号	1952年10月		〃	4		
文学南部	1952年11月	全1号	第1号	1952年11月		B5判	20			
	1953年2月	全1号	第1号	1953年2月		B5判横	16			
下丸子通信	1953年7月	全4号	第1号	1953年7月		B5判	6			
			第2号	1953年8月		〃	6			
			第3号	1953年9月		〃	6			
			第4号	1953年10月	未見		-			
南部文学通信 (『下丸子通信』改題)	1953年12月	全8号	第5号	1953年12月		B5判	8			
			第6号	1954年1月		〃	12			
			第7号	1954年3月		〃	8			
			第8号	1954年5月		〃	8			
			第9号	1954年10月		〃	20			
			第10号	1954年11月		〃	30			
			第11号	1955年3月		〃	14			
			第12号	1955年7月		〃	22			
			第13号	1956年4月		B5判	50			
			第14号	1956年7月		〃	54			
			第15号	1956年10月		〃	74			
			突堤 (『南部文学通信』改題)	1956年4月	全12号	第16号	1957年3月		〃	64
第17号	1957年6月					〃	66			
第18号	1957年10月					〃	88			
第19号	1957年11月					〃	54			
第20号	1958年1月					〃	58			
第21号	1958年4月					〃	48			
第22号	1958年7月					〃	46			
第23号	1958年11月					〃	53			
第24号	1959年5月					〃	52			
南部のうた	1955年1月	全2号				第1号	1955年1月		B5判	27
						第2号	1955年4月		〃	40
版画集	1955年5月	全2号				第1集	1955年5月		B5判	34
			第2集	1955年8月		〃	38			
京浜絵の会 生活版画集	1955年5月	1号	第1集	1955年5月		B5判	4			
			第2集	1955年初夏		B5判	5			
付録	1951年12月	1号	松川報告詩集、松川構成詩(計3点)	1951~53年		B5判	52			
			東京文学新聞	1951年12月		B5判	4			
			町や職場のことを詩集下丸子へかき送ろう(ピラ)	1952年12月?		B5判	4			
			高島青鐘詩集	1953年9月		B6判	86			
			江島寛詩集	1955年8月		A5変形	67			
			詩集(浅田石二・井之川巨・城戸昇)	1957年10月		A5変形	83			
			生きている風景(竹内昭雄)	1960年12月		A5変形	98			

「戦後文化運動雑誌叢書」①~⑥(復刻版)のご案内

1 南風書房発行/北川晃二編
[昭和二年~二四年刊]
午前《全五巻・別冊二》
A5判・上製・総二、一〇四頁
●別冊II解説・回想・総目次・索引
●解説II狩野啓子・長野秀樹・深野治
●挿定価II九〇、〇〇〇円十税
●推薦II大西巨人・紅野敏郎
二〇〇四年六月刊 ISBN4-8350-5397-8



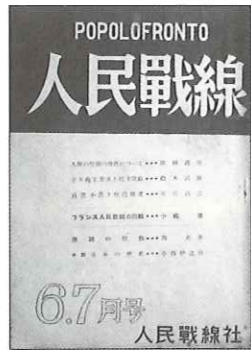
2 三帆書房発行/大西巨人ほか編
[昭和二年~二三年刊]
文化展望《全三巻・別冊二》
B4判並製・B5判上製・総六六六頁
●別冊II解説・総目次・索引
●解説II赤塚正幸・大西巨人・狩野啓子
●挿定価II二八、〇〇〇円十税
●推薦II大西巨人・紅野敏郎
二〇〇四年六月刊 ISBN4-8350-5304-4



4 九州サークル研究会発行
[昭和三年~三六年刊]
サークル村《全三巻・付録一・別冊二》
A5判・B5判・上製・総一、九四六頁
●別冊II解説・回想・総目次・索引
●解説II井上洋子・坂口博・松下博文
●挿定価II六五、〇〇〇円十税
●推薦II有馬学・池田浩士・上野千鶴子・鶴見俊輔
二〇〇六年六月刊 ISBN4-8350-5715-5



5 人民戦線社発行/中西伊之助主筆
[昭和二〇年~二四年刊]
人民戦線《全五巻・別冊二》
A5判・上製・総一、七〇〇頁
●別冊II解説・総目次・索引
●解説II勝村誠・秦重雄
●挿定価II六八、〇〇〇円十税
●推薦II高柳俊男・西田勝
二〇〇六年一月刊 ISBN4-8350-5737-6



3 鵬同人社ほか発行/岡田芳彦・出海漢也ほか編
[昭和二〇年~二五年刊]
鵬・ピオネ・藝術前衛《全三巻・別冊二》
菊判・上製・総八八六頁
●別冊II解説・総目次・索引
●解説II赤塚正幸・麻生久・出海漢也
●挿定価II三五、〇〇〇円十税
●推薦II大西巨人・紅野敏郎
二〇〇四年六月刊 ISBN4-8350-5309-5



6 大阪朝鮮詩人集団機関誌
[昭和二八年~三八年刊]
ヂンダレ・カリオン《全三巻・別冊二》
A5判・上製・総九二二頁
●別冊II解説・鼎談・総目次・索引
●解説II宇野田尚哉・細見和之
●挿定価II三六、〇〇〇円十税
●推薦II金時鐘・梁石日・鶴飼哲・米谷匡史
二〇〇八年一月刊 ISBN978-4-8350-6268-6



東京南部 サークル雑誌 集成

複製版収録

全3巻＋付録1＋別冊1

● 複製版収容内容

第1巻 『詩集下丸子』『京浜文学新聞』『くらしのうた』『石ツブテ』『文学南部』『京浜のうたごえ』

『下丸子通信』『南部文学通信』

第2巻 『突堤』(第13号～第19号)

第3巻 『突堤』(第20号～第24号)『南部のうた』『版画集』『京浜絵の会』『生活版画集』

付録Ⅱ 『松川報告詩集、松川構成詩』(計3点)『東京文学新聞』『町や職場のことを詩集下丸子へ
かさ送ろう』『高島青鐘詩集』『江島寛詩集』『詩集』(浅田石二・井之川巨・城戸昇)『生きている風
景』(竹内昭雄)

● 体裁——B5判(原本にはB6判やA5変形判などがあるが、複製版の体裁上すべてB5判に統一)・上製・総1、800ページ

● 別冊——解説・解題・回想・総目次・索引(A5判・並製)

別冊のみ分売可Ⅱ本体価格1,000＋税
ISBN978-4-8350-5908-2

● 解説——道場親信(和光大学准教授)

● 解題——浜賀知彦(文学史研究者)

● 回想——浅田石二・桂川 寛・丸山照雄・望月新三郎

● 推薦——小関智弘(作家)・坪井秀人(名古屋大学大学院教授)・

西川祐子(近現代史研究者)・ハリーハルトトゥーニアン(ニューヨーク大学)

● 刊行——二〇〇九年七月

● 定価——本体揃価格六八、〇〇〇円＋税 ISBN978-4-8350-5903-7



南部文化集團のころの江島寛(手前)、右は井之川巨(1954年)～「詩と思想」(土曜美術出版販売刊、2004年、第3巻第221号より)



1958年頃、大森の城戸昇宅にて～写真提供、撮影＝望月新三郎氏

● 表示価格はすべて税別。

不二出版

〒113-0023
東京都文京区回廊1-2-12
電話03-3812-4433
フAX03-3812-4464
振替001600294084